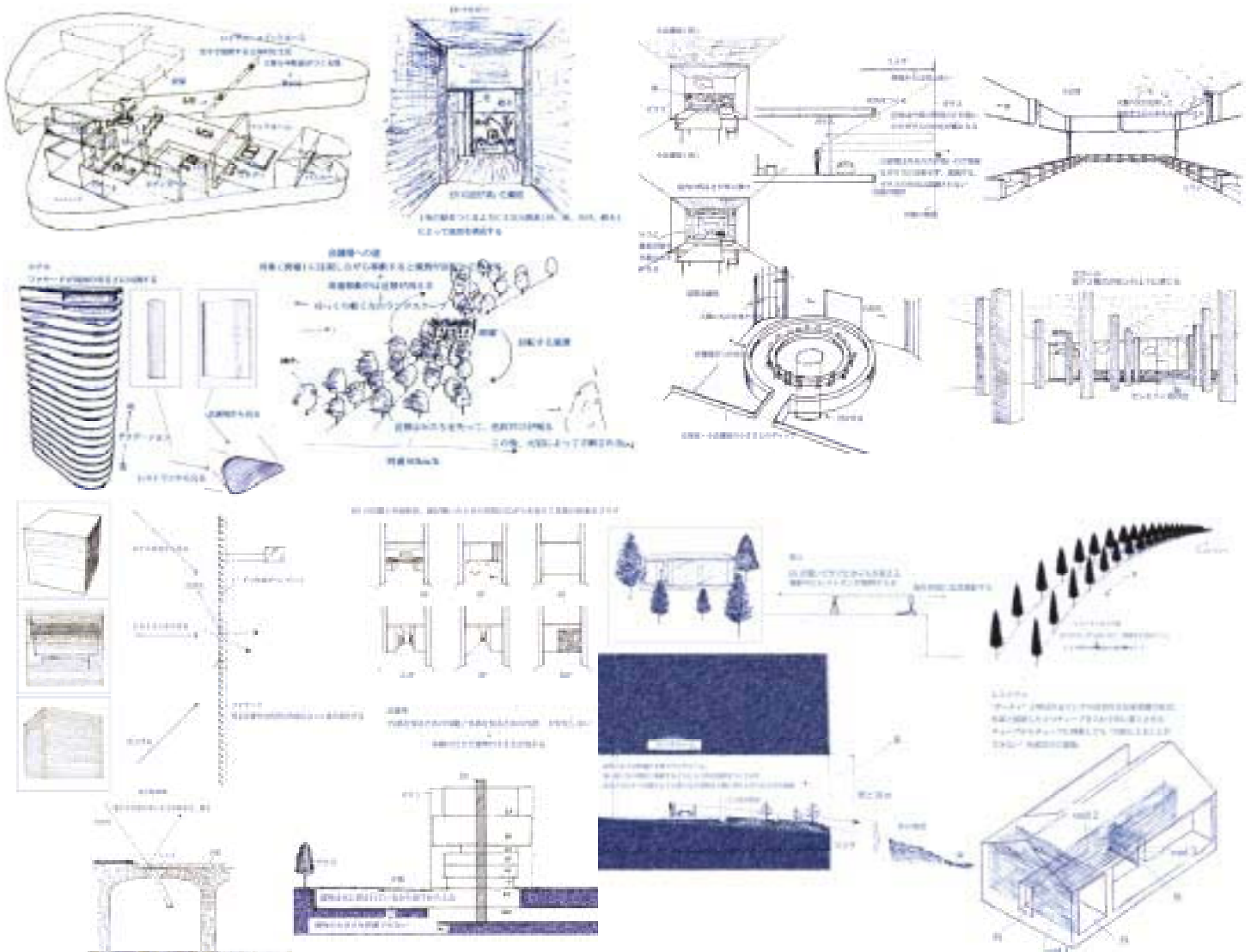


■フラグメント

下のフラグメントをあなた自らがつなぎ合わせて、あなたの物語を構築してください。それは人によって異なる様々なかたちとなるでしょう。



■画コンテ



■はじめに

現代建築には問題がある。それは持続できない“新しさ”を価値の拠り所としていることである。人々の価値認識が多様かつ流動的な現代では、竣工時に華々しかった建築もすぐに“新しさ”を失い、その存在は消費され埋没してしまう[fig. 1]。そうした“新しさ”に依存しない建築のありかたを見つけたい。それに応えるような「普遍性」のあり方を提示したい。



[fig. 1] 現代建築(フォーラム 2004、設計ヘルツォーク&ド・ムーン)

■カフカが示した質

プラハの文学者フランツ・カフカの作品は、なぜ今なお、古びることなく読まれ続けているのだろうか。実存主義、ユダヤ教、精神分析一。カフカは様々な視点から論じられてきた。千差万別の解釈を生み出すその仕組みは建築の方法論として焼き直し可能であると考えられる。

■目的

本設計では建築の価値が古びないための方法論を探求する。具体的にはフランツ・カフカが文学世界で示した空間の質を構造化し、建築体験に定着させることで高い解釈可能性を獲得する。それはローカルな次元に回収されない、時や場所を超える建築の豊かさの提示になる。

■敷地とプログラム

設計対象は、2012年にロシア連邦極東の都市ウラジオストクで開催されるアジア太平洋経済協力(APEC)首脳会議に必要とされる一連の施設である。

□極東ウラジオストク

「東方を征服せよ」という意味を持つウラジオストクは、1860年に国境警備の施設が設置されて以来、ロシア帝国極東地域の拠点として発展してきた、天然の良港を抱く、地形の起伏に富んだ都市である。漁業、水産加工業及び造船、船舶修理等が産業の中心となる人口60万人の都市であるが、首都モスクワから遠く離れ、ソビエト崩壊後は社会混乱して停電が続くなど開発が遅れていた。しかし、近年は経済が安定し、建設ラッシュになっている[fig. 2]。



[fig. 2] 極東の都市ウラジオストク

□極東を開発すること

ロシアのプーチン政権が、長年発展から取り残されてきた極東地域の開発に本格的に乗り出そうとしている。それには以下の背景がある。

- ・ 原油高による急速な経済成長から、それまでインフラ整備が遅れていた極東の開発が可能となった。
- ・ 現在のロシアの主なエネルギー産地、輸出先が今後アジアにシフトしていくために極東に拠点が必要となった。

□APEC In Vladivostok

ロシアで初めての開催となるAPEC首脳会議では、期限が切れる京都議定書に代わる新しい気候保全を計画する。ホスト国であるロシアにとって、アジア太平洋地域の大国としてのプレゼンスを高める重要な機会となる。またAPECの舞台となる無人島ルスキー島をゼロから開発し、これを機に今後、島全体を一大観光地にするを目標としている[fig. 3]。

本設計において、カフカ的方法論の実践が、出来事としてのAPEC首脳会議の成功、ルスキー島大開発に先立つ豊かなアーバン・ファブリックの提示、両者と同義であるべきである。



[fig. 3] ルスキー島の航空写真

■カフカの世界

□“何を描いたか”ではなく“どう描いたか”

カフカ文学は作品そのものよりも、それについて解釈した文献の数の方が圧倒的に多い。サルトルが読めば実存主義的に、ベンヤミンが読めばユダヤ的神秘主義として解釈できる。あるいはフロイト流の精神分析論を展開することもできる。つまり、カフカ作品は見る位置によって形が変わる不思議なだまし絵のようなものである。本論にとって重要なのは作品の“意味”ではなく、だまし絵を形成する描き方、“文法”を問うことである。

□カフカの文法

カフカ文学を読むと、以下に似た感覚に見舞われる。

「足元を見ながら歩いていて、ふと顔を見上げると見知らぬ場所にいた。後ろを振り返っても、迎ってきたはずの道が消えている。何もわからない」

[fig. 4]



[fig. 4]

このような体験は3つの文法によって実現される。

①変形

物語は冒頭で示されたある主題(事件)を追うことで展開し、それは詳細に描写される。しかし、同時に主題そのものが変奏曲のように次々と変形していく[fig. 5]。物語はそのまま結論に達することなく、突然終わる。つまり物語は変形のプロセスだけで出来ている。

$$A \rightarrow A' \rightarrow A'' \rightarrow A''' \rightarrow \dots$$

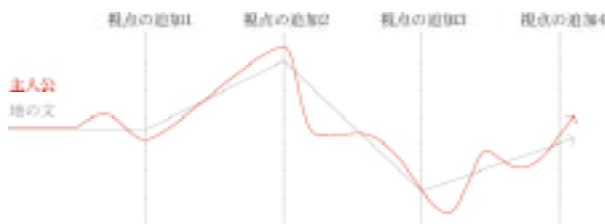
[fig. 5] 主題 A の変形

②切断

物語における主題の変形は、それまでの展開を否定することによってなされる。一旦提示されたイメージを支えるものが、徐々に取り消されていき、その意味が空洞化していくのである。文学は形式ではページを読み進めることで内容を把握していくため、それまでの展開は否定されたところでフッと消えるわけではなく、不可解な断片として頭に残ってしまう。こうした切断のプロセスが、詳細でシームレスな場面描写を非連続的な微視的描写の集合へと変える。

③視点の特殊性

カフカ文学では、主人公の主観が地の文に溶け込んでいる。つまり、物語は一人称、三人称ともに“ひとつの視点”で描かれている。そのため、読者は主人公の主観的(間違いだらけ)な世界をあたかも俯瞰で見た客観的な世界として読んでしまう。そしてその客観性に矛盾が浮かび上がった瞬間、不思議な空白感を感じることになる[fig. 6]。



[fig. 6] 主人公の主観と地の文:視点の追加によって物語世界が変化する

□ 読者が各々構築する物語

カフカ世界の“体験としては連続しているが、印象として非連続である”ことは②(切断)という手段によってつくられた①(変形)が起こしている。さらに③(視点の特殊性)がヴェールとなって、読者は①②の存在に気がつかない。提示される断片群としての作品は結果として未完だけではない。作品世界は開かれている。読者は自らそれら断片をつなぎ合わせることで独自の物語を構築する。その作業は読者の意識が反映されるために、各々異なる様々なかたちとなる。

カフカの世界はこのような構造性を持つために、いつまでも読まれ続け、その度に生まれ変わるのである。

■ 建築化-ひとつの視点から描かれた物語

□ プログラムとの応答

これまで定義してきたカフカの空間をふまえた上で、設計条件を整理する。本設計はウラジオストクの無人島で開かれるAPEC首脳会議に必要なとされる諸施設の計画である。計画すべきその最優先事項は何で

あるか。それは会議場や宿泊施設、娯楽施設ではない。むしろ「出来事」としてのAPEC首脳会議の計画である。過去のAPECを調査すると、会期中の行事は毎回共通しており、その動きは想定可能である[fig. 7]。



[fig. 7] APEC 首脳会議のイベント

□ シナリオに現れる空間をつくる

そこで、一国の首脳の日を追ったシナリオ、APEC首脳会議の物語を描くことにする。そしてそれが展開していく中で現れる空間を設計する。そのように設計対象を「ある知覚者が通時的に横断する空間群」とすることでカフカの建築を構想する。

□ 断片の連続

断片が連続してできたシナリオとしての建築は、一つの建物に収まらない[fig. 8]。シナリオを構成する各空間は場面毎に異なる状況から生まれた秩序であり、それは一枚の写真、ショットやシークエンスのように独立したものとして形成される。それらを時間の中でつなぎ合わせて、一連の「出来事」としてのAPEC首脳会議を計画する。



断片に分解されたイベント



要求されたイベントに単体の建物で応える

[fig. 8] シナリオとしての建築

□ ひとつの視点

知覚によって認識される空間を設計する。限定的な視点からモノとその現れ方を考えることで逆説的に空間の自由度を獲得する[fig. 9]。またシーン毎に位置や時間など知覚者が置かれている状況を明確に設定できるため、それぞれに具体的な空間を計画できる。

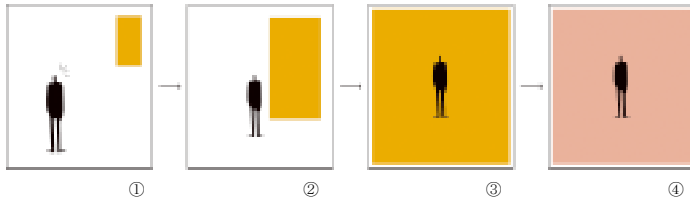


[fig. 9] 限定的なモノの見え方

□空間認識

人の知覚やその対象の“確実性”は相対的なもので、暫定的なものでしかない。空間が知覚する時間や距離によって物質的变化をすることで、認識のレベルで建築を断片化していく。①-④のプロセスが繰り返されることによって、蓄積される空間イメージは A→A'→A''→A'''... というように少しずつ変わっていく。

- ①向こうになにかがある ②そこに向かっていく ③そこに達する
- ④その空間はいつの間に変質してしまっている[fig. 10]



[fig. 10] カフカの空間認識のプロセス

□ 空洞化した全体

連続する空間体験はイメージとして非連続的になっていき、最後には不透明な断片が残り、全体は空洞化する。その空洞は空間体験者がうめることで空間イメージを再構築する[fig. 11]。



[fig. 11]

□シナリオの解体

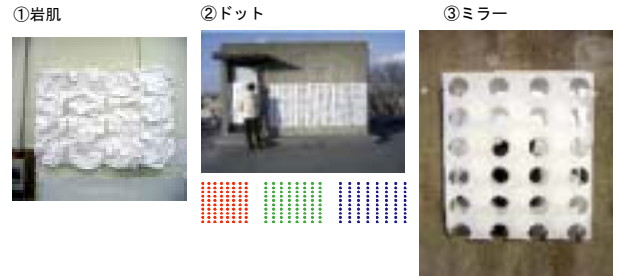
APEC首脳会議が終われば、知覚者を特定して構想されたシナリオは解体し、各空間はバラバラになって、特異な断片として残る。それは意味を持たない現象としての再解釈の種である。それは今後の開発に対して身体的なアーバン・ファブリックとなりうる[fig. 12]。



[fig. 12] ルスキー島に蒔かれた断片

□スタディ-具体の論理

空間認識の位相の移り変わりは、シームレスに起きないといけない。「部屋—部屋」「外—内」などと通常の建築空間の切り替えと単に一致させるのではなく、体験者によって異なるようにすべきである。質料(素材)と形相(かたち)との組み合わせを広く物質的情報として捉え、その物質的情報(記号)が位相を変化させる。検証はモックアップをつくって観測することで行われる。どの瞬間に記号が変化するか身体的に把握する、具体の論理とも言える作業である[fig. 13]。



①岩肌	②ドット	③ミラー
紙で岩のようなゴツゴツした肌理を再現し、観測する距離で肌理がどのように見えるかの実験。	ゲシュタルト心理学の「近接しているものはまとまりとして認識される」性質から、直径4cmの黒点の間隔を縦横で変え、どのように見えるかの実験。	多孔質の面の背後にすえられたミラーがどのように影響するかの実験。直径4cmの孔の間隔、縦@200横@400
結果	結果	結果
7 m つなぎ目が消える	① 近接によってストライプ状に見える距離。	5 m 鏡が認識される
9 m 紙であることがわからなくなる	② 点が消えて面がグレーになる距離	20 m 近接の法則がなくなる
108 m 何かある	結果	65 m 孔が消えて輝く面になる
140 m 均質な面に見える	(i) 縦@200横@400 ①3 m ②16 m (ii) 縦@200横@600 ①34 m ②82 m (iii) 縦@200横@800 ①60 m ②127 m	

[fig. 13] 具体の論理/距離によって変化する記号のスタディ

■ 総括/開かれた物語

フランツ・カフカの文学が持つ空間の質を建築に応用することであるひとつの普遍性のかたちを提案した。

建築化されたカフカ的世界において、私たちの体験はおのおのの断片をたどっていくしかない。それらに対する知覚の記憶が脳に集積し、あるひとまとまりの調和となる。しかし次の瞬間に現れる断片がその調和を崩してしまい、また別の理解を要求する。そうした調和と崩壊の連続によって、暫定的な全体像が現れる。

このような次元の建築はモノが先攻しない、関係性の世界のものである。常に新たな要素を足すことができる、外部に開かれた建築はカフカ文学のように人々に解釈され続け、何度でも生まれ変わる。